

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00934

研究課題名（和文）地方都市における町共同体の性格に関する基盤的研究

研究課題名（英文）Historical research of town community of local city in early modern japan

研究代表者

多和田 雅保（Tawada, Masayasu）

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：10528392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は信濃国（現長野県）と相模国（現神奈川県中西部）において、近世を通じて多く存在した中小規模の地方都市を対象として、それぞれの都市を構成する自治の最小単位であった町共同体に注目し、歴史的性格の解明作業を行った。具体的には、（ア）町と商業及び商人との関係を中心にしつつ、（イ）町と町を取り巻く自然環境との関わり、（ウ）町の自治のあり方、（エ）それぞれ異なる地域特性を持つ都市における町の固有性の4点について、小布施村、中野村、和田町（以上信濃）、上溝村（以上相模）などの事例分析を基礎として解明作業を行った。そして、以上を総合化して、近世の地方都市における町共同体の性格についての成果を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の日本は、人口の首都圏への一極集中と地方の「衰退」が深刻化しており、地方都市に注目した研究が強く求められている。歴史学では「都市の時代」とも呼ばれる近世段階に注目して地方都市の歴史を論じる必要があり、その際、町共同体の性格を正面からとりあげることが重要である。日本近世の町共同体の性格は古くから盛んに論じられてきたが、江戸や京都などの巨大都市を対象としたものが大部分であり、地方都市固有の町のあり方を論じたものは蓄積に乏しい。本研究は地方固有の町と商業及び商人との関係や、町と周囲の自然環境との関わり、町の自治のあり方に注目して解明作業を進めたものであり、学術的にも社会的にも意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the small and medium-sized local cities that existed in abundance throughout the early modern period in Shinano Province (present-day Nagano Prefecture) and Sagami Province (present-day central-western Kanagawa Prefecture), and examined their historical characteristics, focusing on the town communities that were the smallest units of self-government that made up each city. Specifically, focusing on the relationship between towns and commerce/merchants, the relationship between towns and the natural environment surrounding them, the nature of town self-governance, and the uniqueness of towns within cities each of which has different regional characteristics, I conducted clarification work based on case studies such as Obuse village, Nakano village, and Wada town (all in Shinano) and Kamimizo village (in Sagami). Then, by synthesizing the above findings, I published the results of my research on the characteristics of town communities in early modern local cities.

研究分野：日本近世史

キーワード：日本近世 地方都市 都市・農村関係 町共同体 身分 商業 商人

1. 研究開始当初の背景

日本近世における町共同体(以下、「町」と称する)の性格については、朝尾直弘が1990年代までに「地縁的・職業的身分共同体」とであると措定した(朝尾直弘『都市と近世社会を考える』朝日新聞社、1995年)。これに対しては、論点を深化させる方向で、いくつかの批判的継承が試みられてきた。たとえば吉田伸之は、町を構成する町屋敷について、町人=職人型と町人=商人型とに類型化したうえで、具体的な検討を深める必要があるという見方を提示した(吉田伸之『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版社、2000年)。しかし、これらの研究がなされてからかなりの時間が経過したにもかかわらず、結局「町」の歴史的特質とは何かという問題について、それ以上追究が深められることはなく、都市史研究の論点は拡散化することになったと考えられる。

ここで注目すべきは、日本の近世段階を「都市の時代」として捉える見方があるということである(山口啓二『鎖国と開国』岩波書店、1993年。吉田伸之「都市の近世」(吉田編『日本の近世9 都市の時代』中央公論社、1992年))。これらの見方は、近世社会には中世とは比較にならないほどの多様な都市が、列島社会全域に出現したことによって提示されたものである。しかし、都市が全国に出現したことがいかにして近世という時代を規定したかという点についての考察は、案外行われていないという状況があった。

近世における「町」は、都市を都市として機能させる重要な要素であるということができる。なぜなら、近世日本には城下町をはじめ、宿場町、門前町、港町、鉾山町などさまざまな累計の都市があり、時代を下るにつれて各地に在郷町が出現したが、「町」を構成要素としない都市は皆無といってよいからである。また、近世の「町」は、町屋敷所持者たちによって構成される土地に根差した共同体であり、その土地を共同で保全することを目的としていた点で「閉じた」性格を持っていたが、そこでの共同性は、個々の町屋敷が外部に「開かれた」性格を持っていたことに起因しており、「町」は閉鎖性と開放性という矛盾した性質を併せ持っていたということができる。この点で、「町」の性格自体、都市一般の性格を具現化したものであるということができる。

それにもかかわらず、「町」の性格に関する具体的な検討は、おもに江戸や大坂といった巨大都市や、地方でも比較的規模の大きな都市においては一定の進展が見られるものの、中小の都市では進んでいないという状況があった。近世の地方中小都市における町については、渡辺浩一が住民結合の視点から一定程度の研究を蓄積しているが(渡辺『近世日本の都市と民衆』吉川弘文館、1999年)、さらに深めていく必要があったといえる。以上が研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、中小規模の地方都市を対象として、近世の「町」が閉鎖性と開放性という矛盾した性質を併せ持つことに注目し、「町」の性質を地方の文脈のなかで個別具体的に解明することを目的としたものである。地方都市をとり上げるにあたっては、以下の4点を重視した。(ア)「町」は近世初頭の統一政策において全国的に一挙に出現し、その点で政治性・画一性を持つが、個々の「町」の住民はそれぞれの地域の在地社会から集住した者が多く、その点で各地の「町」には地域的な固有の性質があると考えられること。(イ)地方都市は江戸や大坂などの巨大都市と比べた場合、周囲を田畑などの耕地や山野河海などの自然環境に囲まれており、個々の「町」も商業や工業といった自然環境とは直接関係しない局面だけでなく、自然環境の影響を直接受ける可能性が高いこと。(ウ)江戸のような巨大都市においては、近世後期、社会的分業の進展と階層分化によって、「町」が住民にとって必ずしも依拠すべき身分共同体たりえなくなっていたことが指摘されているが(横山百合子『明治維新と近世身分制の解体』(山川出版社、2005年))これが地方都市でそのまま適用されるかどうかは検討の余地があること。(エ)現代日本において深刻化している首都圏への一極集中現象と地方における都市の衰退、人口減少を念頭に置いた場合、地方における都市の自治のあり方を考察することは、現代社会のニーズに応える、優れて実践的な価値を持つと考えられること。以上である。

3. 研究の方法

本研究計画では、主なフィールドを信濃国(現・長野県)と相模国(現・神奈川県中西部)に置いて、個々の事例を具体的に検討した。具体的には以下の4つのフィールドを対象とした研究をめざした。

(1) 信濃国北部の都市群、特に高井郡小布施村(現長野県上高井郡小布施町)をとりあげた。ここは六斎市の置かれた市町であり、小規模ながら市場関係史料と町の運営に関する史料を豊富に持った、きわめて貴重な場所である。本研究では商業を町屋敷所持者が外界に向かって自らを開いていく行為として捉え、彼らの集積体としての町の自治の特質について、小布施を対象として具体的に検討することをめざし、善光寺町や中野など、近隣都市においても町の実態を探っていくことを意図した。

(2) 信濃国南部の城下町飯田をとりあげた。飯田の町人地は18箇所の個別町の集積から成り立っていたが、町人身分＝町屋敷所持者たちは山林用益権を持ち、また、周辺農村に広く耕地を所持していた。さらに町を貫流する用水の管理権を持つなど、彼らは町共同体の構成員であることによって、周辺の自然環境とも深くつながり、生活を維持していた。以上に注目し、飯田における「町」を基軸とした都市・農村関係の解明を試みた。

(3) 信濃国南部の松島村と木下村（ともに現長野県上伊那郡箕輪町）をとりあげた。ここは、信州南部で広域に展開した中馬争論の発端の場所であり、古島敏雄の古典的業績『信州中馬の研究』（伊藤書店、1944年。『古島敏雄著作集 第4巻』東京大学出版会、1974年に所収）でも採り上げられた重要な場所である。本研究では、伊那街道の馬継場である松島とあわせて、中馬の活動の拠点であった木下も都市的な場であったことに注目し、その具体的解明をめざした。なお、結果的に、(3)についてはほとんど検討を深めることはできなかった。

(4) 相模国の小都市群 信濃国における都市が、現在に至るまで町場の雰囲気を残しているのと対照的に、相模国における諸都市は、近代、とくに産業革命（19世紀末）以後、急激に東京を中心とする大都市圏に飲み込まれていく存在であることに注目し、高座郡上溝村と津久井郡川尻村（ともに現相模原市）の市町を中心に、ほかの小都市も検討対象に加えながら、相模における小都市群について、町共同体の存在形態を解明することを目指した。

4. 研究成果

研究機関中、新型コロナウイルス感染症が拡大したため、当初の計画ほど現地調査を進めることはできなかったが、それでも以下の成果を得た。

(1) 研究計画が対象としているフィールドのうち相模国（現神奈川県）においては、とくに高座郡上溝村（現相模原市上溝）における近世から近代にかけての定期市の変遷状況についてこれまでの研究史を整理しながらあらたな資料情報を得て考察を行い、地方都市をとりまく在地社会における商人集団についての資料情報と関連させながら町共同体に性格についての研究を進めることができた。実績としては、研究報告「近世相武の町場について」（小田原近世史研究会、2020年09月）を行い、また、講演「近世相武の町場と商人」（横浜古文書を読む会主催、2020年11月）で成果の一部を披露した。さらに、近世から近代にかけての座間地域の商業を中心とする生業、交通、宿場町の様子に関する歴史情報を得て研究を進めた。

(2) もうひとつのフィールドである信濃国（現長野県）北部では、近世の小布施村における魚流通の実態や、魚問屋設置をめぐる問屋と町内外の人びと（とりわけ地元の魚商人や越後から来る魚商人）との利害関係などについて、城下町飯山（現飯山市）の状況と比較しながら考察を進めることができた。また、小布施に拠点を置いて明治以後活躍した商家の歴史資料調査を重点的に行った。この家は、もともと越後国頸城郡の漁村（現・新潟県上越市大潟区）に本拠を持っていたが、一族が近隣の港町直江津と小布施、そして北海道瀬棚郡虹羅村（現・せたな町）に分かれ、相互に婚姻関係を幾重にも取り結びながら同族団全体で漁業及び漁獲物流通に携わった。調査では同家の資料から遠隔地の地方都市・村落間を取り結ぶネットワークの存在を検出しつつある。また、幕府代官所の陣屋元村として都市化を遂げていた高井郡中野村（現中野市）と、周辺の数十か村とにまたがって1000人の規模で存在した大規模な香具師＝商人集団の構造について考察を進め、同集団が実質的には荒物商、小間物商、菓子屋、青物商といった日用品を扱う商人集団の複合からなっていること、中野村を拠点とする数十人の親分と中野村や周辺の村々に分厚く存在する身内との個別関係を包含するかたちで仲間が結成されていたこと、親分が商人を宿泊させる宿としての機能を有しており、その経営を核として商品が流通したことなどを見出すことができた。研究成果としての編著『身分社会の生き方』に掲載した論文「百姓と商人の間」では、中野村の町場を中心に、周辺の広範囲の村々にわたって展開した商人仲間注目し、仲間の構造と構成員の社会的位相、取り扱う商品（荒物・小間物など）の特質、商品流通が取り結ぶ三都と地方都市、農村の間で取り結ばれた関係について解明した。

(3) 信濃国南部では、城下町飯田を対象として、都市と周辺農村とにまたがる社会構造について、屋敷や耕地などの地片の機能に注目することでこれまでの研究成果をまとめ直し、単著の公表にむけてかなり研究を進展させることができた。幕末維新时期を中心とする飯田町の有力町人の書簡群、および、飯田市遠山地区に存在した町場である和田町の商人のもとにもたらされた商業関係史料群について調査研究を行い、飯田市域を対象とする近世から近現代にかけての都市の社会構造、都市における共同体の性格、そして都市と周辺農村との関係について相当程度研究を進展させることができた。これについては研究期間内に実現できなかったが、2024年6月現在、単著としてまとめ刊行すべく準備中である。

(4) さらに、本研究計画に強く関係する内容として近世の身分制と社会集団の研究を進め、

2022年10月に開催した部落問題研究所全国集会において口頭発表を行った。その成果論文「社会集団史を活かす」では、塚田孝編『社会集団史』(山川出版社、2022年)の内容を紹介しつつ、前近代史研究の意味、社会集団と人間の生存・生活を結びつける視角の意義、近世における御用の論理と社会集団の関係について指摘しつつ、近世を「都市の時代」として位置づけ、町の開かれた／閉じた両義性に注目しつつ、町方固有の社会集団の特質について論じた。また、共著『日本近世史入門』では、論文「都市社会」を執筆し、町を起点として都市を検討することの意義、生活・生存の場としての都市という問題設定、地方都市固有の研究課題、都市社会と在地社会との関係についてまとめ、研究課題を指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 多和田雅保	4. 巻 245
2. 論文標題 社会集団史を活かす	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 多和田雅保
2. 発表標題 社会集団史を活かす
3. 学会等名 部落問題研究者全国集会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 多和田雅保
2. 発表標題 近世相武の町場について
3. 学会等名 小田原近世史研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 多和田雅保, 牧原成征, 後藤雅知, 中安恵一, 三田智子, 町田哲, 東野将伸, 吉元加奈美, 塩川隆文	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 202
3. 書名 身分社会の生き方	

1. 著者名 上野大輔, 清水光明, 三ツ松誠, 吉村雅美, 谷徹也, 三宅正浩, 小倉宗, 山本英資, 村和明, 酒井雅代, 木土博成, 牧原成征, 小松健司, 高槻泰郎, 佐藤雄介, 伊藤昭弘, 小田真裕, 後藤敦史	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 411
3. 書名 日本近世史入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関